佐賀と水との関わり～人自然の共生～

①クリークの成り立ち

干拓によって徐々に農地は広がっていきましたが、水源となる背振山地は保水力が乏しいうえに、河川の規模も小さく、慢性的な水不足に悩まされてきました。

そこで、農業用水の確保のため、人々は低湿地を掘り下げクリークをつくっていきました。クリークは用水路とため池の両方の役割をもち、田んぼに必要な水は直接川からではなくクリークから引かれていました。

※写真は、クリーク公園

②多布施川の成り立ち

多布施川は、嘉瀬川から分水した河川で、17 世紀はじめに成富兵庫茂安によって作られました。貴重な飲み水の水源でもあり、人々によって大切に利用されてきました。多布施川から分岐した水路は住宅地を流れ、郊外のクリークさらには田んぼにまでつながり、広く水が行き届くようになりました。

※写真は、多布施川

③人と水辺とのつながり

佐賀の農業は、クリークをうまく利用しながら発達していきました。

a.「川干し」により定期的に泥上げが行われ、その泥は田畑の肥料として利用されていました。これはクリークの水質保全や陸地化の防止にも役立ちました。

b.土手にはヤナギ類、エノキ、ムクノキなどが植えられ、護岸の補強とともに農作業の休息場所としても利用されました。
c.クリークに生育するアシやモコは燃料、屋根の材料、簾などに利用され、コイやフナなどの魚は人々の蛋白源にもなりました。

※写真は、昔の堀干しとクリークの風景

④人と自然の共生

川と田んぼとクリークが結びついてできた佐賀平野の水辺環境は、人の手によって定期的に泥あげや刈り取りが行われることで、同時に生物がすみやすい環境を保ってきました。今でも人の住んでいるすぐそばにたくさんの珍しい生き物が生息しています。

植　物

植生の分布状況は、地形を反映するように、水田雑草群落が大半を占めておりそれらが中心市街地を取り囲むように分布しています。一部の河川沿いにはヨシ群落が、北部の山地部には、常緑果樹園やスギ・ヒノキ・サワラ植林、シイ、カシ萌芽林がそれぞれ分布しています。

金立山や川久保の山地にはまとまった森林があり、ブナ科やクスノキ科を中心とする樹木で構成されています。林床に生育するシダ類の種数も多く、植物相は豊富です。

クリークなどの水辺にはハス、ヒシ、キシュウスズメノヒエ、マコモ、ヨシ等の水生植物が繁茂しています。

これまでの調査では約 940 種類の植物の生育が確認されています。このうち、全国的に絶滅の恐れのある種などの貴重な植物としては、ヒシモドキ、オニバスなどが生育しています。また、エヒメアヤメ自生南限地帯が国の天然記念物に、佐賀城跡の楠群は県の天然記念物に、その他、市内に点在する楠等の巨木が市の天然記念物にそれぞれ指定されています。

エヒメアヤメ

（アヤメ科　RDB 絶滅危惧 IB 類）

中国、四国、九州の草原に生える多年草で、4 月には高さ 5～10cm の茎の先に、径4 cm ほどの青紫色の花を咲かせます。

ヒシモドキ

（ゴマ科　RDB絶滅危惧 IA 類）

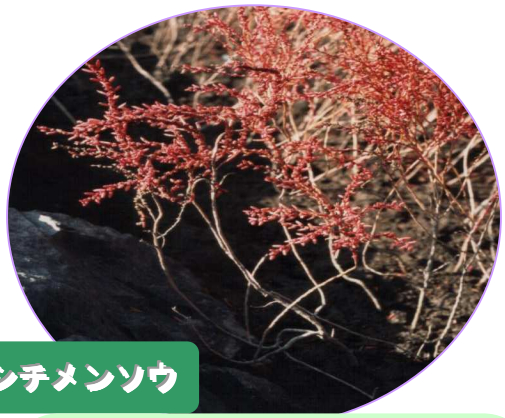
本州、九州の平地のため池、水路などに生育する一年生の浮葉植物で、一辺約 2cm の三角形に近い葉がヒシに似ていることからその名前があります。8 月上旬に淡いピンクの花を咲かせます。

ノウルシ

（トウダイグサ科　RDB 絶滅危惧Ⅱ類）
　クリークの土手にはえる多年草で群落をつくります。茎は高さ 40～60cm、春に上部の葉が黄色になり、その葉の間に多数の小さなさかずき状の花を咲かせます。

オニバス

（スイレン科　RDB 絶滅危惧Ⅱ類）
　本州、四国、九州の平地のため池、水路などに生育する一年生の水生植物で、直径 2m にもなる葉をつけ、全身に鋭い刺があるところから、この名がつけられたと言われています。8～9 月ごろに、赤紫色の花を咲かせます。



シチメンソウ

（アカザ科　RDB 絶滅危惧Ⅱ類）
　九州の代表的な塩生植物であり、海岸の砂泥地に育つ一年草で、茎の長さは 20～40cm 程度、9 月ごろに花を咲かせます。11 月になると草全体が緑色から赤紫色に変わるためシチメンチョウに例えてその名がついたと言われています。

魚類

北部九州地域は全国で 2～3 位を争うほどの淡水魚類の生息地です。 その中でも、本市は水源となる背後の山々の標高が低いにもかかわらず、有数の生息地となっています。特徴としては、緩やかな流速を好む止水性のコイ科の純淡水魚と、有明海との間を往復する回遊魚が多いことであり、他の地域では見ることのできない種も多く生息しています。

これまでの調査では、168 種の魚類が確認されており、このうち、全国的に絶滅の恐れのある種などの貴重な魚類としては、ニッポンバラタナゴやスジシマドジョウ小型種、ヤマノカミなどが生息しています。

ニッポンバラタナゴ

（コイ科　ＲＤＢ絶滅危惧ＩＡ類）

かつては西日本のため池や小水路に広く生息していましたが、いまでは各地でタイリクバラタナゴとの交雑が進み、日本固有亜種は佐賀平野が最大の生息地と言われています。大きさが約５cmの淡水魚で「でんばや」などの地方名もあります。

スジシマドジョウ（小型種）

（ドジョウ科　ＲＤＢ絶滅危惧ＩＢ類）

やや流れのある砂泥底のクリークや水路に生息しています。大きさが６～８cmの淡水魚で、琵琶湖型・淀川型・山陽型・東海型・山陰型・九州型の６つの型に分けられています。

ヤマノカミ

（カジカ科　ＲＤＢ絶滅危惧Ⅱ類）

有明海湾奥部とそこに流れ込む河川にのみ生息しています。大きさは約 16 cmで、海と川を往復する回遊魚です。佐賀では、「かわかみどんこ」と呼ばれることも多いようです。

カワバタモロコ

（コイ科　ＲＤＢ絶滅危惧ＩＢ類）

日本にしかいない魚で、佐賀平野が分布の西端になります。流れのないクリークなどに生息します。特にブルーギルが侵入した水域では、すぐに姿を消してしまいます。

カゼトゲタナゴ

（コイ科　ＲＤＢ絶滅危惧Ⅱ類）
北部九州固有の亜種で、大河川や完全なクリークには住まず、緩やかな流れの小水路に生息しています。

ムツゴロウ

（ハゼ科　佐賀県ＲＤＢ準絶滅危惧種）
有明海と八代海の一部にのみ生息しています。大きさは、約１８㎝で、佐賀の代表的な魚として親しまれています。

鳥類

佐賀市には山地、クリーク、河川、河口等があり、鳥類にとって多様な環境があります。しかしながら、平野部には森林が少ないため、キビタキ、ヤマガラ、シジュウカラなどの森林性の鳥類は、金立山などで確認されています。

佐賀城跡の堀では、市街地であるにもかかわらず、冬には多くのカモ類の飛来が確認されており、良好な越冬地となっており、有明海に注ぐ嘉瀬川や本庄江川の河口は、シギ・チドリ類の飛来地となっています。

これまでの調査では 215 種の鳥類が確認されており、このうち、全国的に絶滅の恐れのある種などの貴重な鳥類としては、クロツラヘラサギなどが確認されています。県の鳥でもあるカササギの生息地は国の天然記念物に指定されています。

クロツラヘラサギ

（トキ科　ＲＤＢ絶滅危惧ＩＡ類）

朝鮮半島中部から北部にかけての海岸沿いで繁殖し、台湾、ベトナムなどで越冬します。日本にもまれに冬鳥として飛来します。1996 年現在確認されている総数は 550 羽にすぎません。ヘラサギに似ていますが、くちばしは全体に黒くヘラのようになっており、目の先端部は黒い皮膚が露出しています。

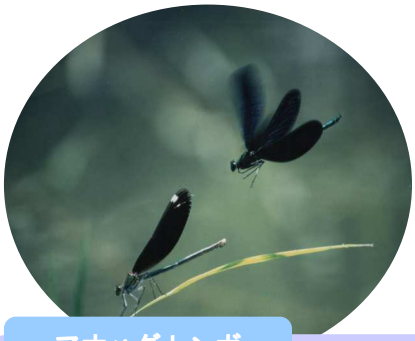
カササギ

（カラス科　生息地が天然記念物）

カササギはカラスよりひとまわり小さく、黒い翼には白斑があります。佐賀県と福岡県、熊本県の一部に分布が限られ、クスノキなどの高木に 1 メートルもの球状の巣を作ります。

昆虫類

水辺環境の多様な本市には水生生物だけでなく多くの昆虫も生息しています。このうち、代表する昆虫類としては、多布施川に生息するアオハダトンボや　　などが生息しています。



アオハダトンボ

（カワトンボ科　佐賀県ＲＤＢ準絶滅危惧種）
九州、本州に分布するが、生息河川は少ない。ハグロトンボに似ていますが、ひとまわり小さい。水辺の過度な除草や林の減少により生息環境が奪われ少なくなってきています。

ネアカヨシヤンマ

（ヤンマ科　佐賀県ＲＤＢ準絶滅危惧種）
アオヤンマよりひとまわり大きく、複眼が青藍色で前羽の基部がオレンジで体の色などで区別しやすくなっています。